

Title	研究開発コロキウム(2010年度): ライフストーリーを活用した地域生涯学習の実証的研究 -野殿・童仙房におけるエコミュージアム活動をフィールドとして-
Author(s)	辻, 喜代司
Citation	子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして(2012), 活動報告書(2007-2011年度): 104-104
Issue Date	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/179701
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ライフストーリーを活用した地域生涯学習の実証的研究 — 野殿・童仙房におけるエコミュージアム活動をフィールドとして —

〔研究目的〕

本学教育学研究科との相互協定関係にある京都府南山城村野殿・童仙房地域において、文化・自然・産業に関わる人々の「記憶」を、ライフストーリーの聞き取り調査を通じて収集・整理・研究することを目的とした。その実施過程においては、地域の人々が地域の価値を見つめなおし、地域づくりの資産を形成するエコミュージアム活動の一環としての、フィールド・実践志向型の研究を目指した。したがって、その調査活動においては、記憶（資料）の価値付けを、研究者の側が一方的に行うのではなく、地域住民との対話を通じて共同で構築する生涯教育的なプロセスを重視した。

〔研究経過〕

研究目的の紹介をとおして、生涯教育学だけでなく、臨床教育学および教育社会学を専攻する院生も参加する研究チームが形成された。各自が、文化・自然・産業などの分野で、その研究手法を生かして、住民の「思い出」を聞くインタビュー調査活動を行った。分析にあたってはライフストーリーの社会学・心理学の手法を活用して、被調査者および調査者の意識・認識の変容を含めた自己教育的研究を目指した。以下はその概要報告である。

辻は童仙房区民を対象とするインタビューから、「童仙房開拓百年にかかわる集合的な記憶」を収集し、その分析を行った。そこでは、住民の記憶が、1969年の記念式典の開催や開拓記念碑の建立を再構成しつつ、現在の地域への思いへとつながっていく様子が記録されている。その解釈においては、開拓百年当時の新聞記事など文献資料も活用した。

猿山の研究（「インタビューの空間」）は、地域住民がその生活をとおして築いてきた人生への思いが導出される過程を、インタビュー場面との関係において検討したものである。農業を営む女性へのインタビューにおいて、話し手と聞き手が対面する場面の变化によって、話し手を中心とした語りにも変化が生じる経緯を分析している。

坂上は、「野殿・童仙房における遊びとその語り：人と自然とを結びつける実践」というテーマで、自然のなかで営まれてきた遊びの体験が、住民の自然観や人生観とどのように結びついているのかを聞き取りによって明らかにしようとした。その研究過程では、語り手の自然への思いと、それが語り出される際の喜びの充溢が注目されている。

上床と岡田の研究は、生徒数の減少によって2006年3月に閉校になった旧野殿童仙房小学校の関係者へのインタビューにもとづくものである。上床は学校をめぐる思い出や、閉校に至るまでの過程とそこに込められた思いを、閉校に反対した卒業生やその保護者から

の聞き取りによって実証的に分析している（「旧野殿童仙房小学校をめぐる記憶—地域・学校・家庭との関係性—」。一方、岡田はPTA活動への着目から、学校と地域が連携的に形成した教育的なコミュニティの存在を指摘し、その「学びの空間」についての考察を行った（「旧野殿童仙房小学校のPTA活動と学校・地域とのつながりについて」）。

鏑は、「日記に紡がれる生活のつながり—開拓村の暮らしと記録される記憶」というテーマで、童仙房区での日記の習慣に関する聞き取りから、日記に編みあげられる生活の中のつながりを考察した。日記を起点として語られた暮らしや過去の記憶からは、人と人のつながりだけでなく、自然との密接なつながり、子どもとのつながりが浮き彫りとなった。

なお、院生によるインタビュー調査と並行して、教育実践コラボレーション・センターによって企画された「野童いなか塾」では、「自然観察会」の実施を起点として、エコミュージアム活動にむけた方向性が示されたが、本コロキウムにおいてもその研究活動の一環として、三重県宮川流域のエコミュージアム活動の視察研修を実施した。山口がその報告を行っている（「視察報告：三重県宮川流域におけるエコミュージアム活動について」）。

〔研究成果〕

野殿・童仙房地域における調査活動は4年目を迎え、共同事業の推進ともかわり、基礎データの蓄積とともに、大学と地域との相互的な信頼関係の構築がすすんでいる。本研究では、地域生活の各分野でライフストーリー・インタビューを試みることによって、住民の「記憶」や「思い出」の重層的な構造が明らかになりつつある。

開拓の伝統や横溢する自然のなかで育まれた人生観や自然観は、地域経済の疲弊に苦しむ住民の心の拠り所として機能しているだけでなく、村落共同体の基盤に共通する心性を醸成していると考えられる。また、学校と地域とが協同的に形成した「教育的なコミュニティ」が存在していることも指摘されている。両者を一体化するような働きかけの継続は、今後の地域づくりにも貢献できる可能性がある。

院生の研究活動は、このような無形の「地域資産」を活性化するとともに、生涯教育学における、調査者と被調査者の新しい関係性の構築にむけた実践活動として前進している。

（文責：辻 喜代司）